乙女文樂再演の佳照會評

内田三千三

前回の壓倒的好評に應へ、大阪乙女文樂が再招され、愛氷先生及幹部諸氏の活潑な協力によつて初夏の軍人會館に佳照會臨時大會が爽やかに公演された。大夫、絃、人形のオール女性陣が綠風に乘つて演出する熱演譜は一貫した藝術的ムードを良出して本行大阪文樂に次ぐ綜合的快感を盛上げた

○

最初菅原の「車場」は若手の掛合で演る。歌舞伎も淨瑠璃も演出時間は案外短い…が内容はどうして容易で無い。この一段の華やかな中に流れる鮮烈な氣魄と豊かな詩韻は餘程腕が熟して居ないと完描され難い。流石若手連だけに意氣が擧つて…深い旨味こそ油出しないが妙に沈潛せぬのが好い。櫻丸を語る駒龍は味がある。殊に「ながらへる面目なさ」で餘情を持たせ…しつとり悔恨を潤描するやはらか味が良い。たゞず「ふくらみ」と餘韻を心掛けて語る行き方も光澤は未だないが正道で好感を與へる。

「ざん言によつて御沈落」……に深い心韻が欲しいのと「思ひ設けし今日只今」……の音遣ひにモウ少し滋味がありたいが。佳仙の梅王は稍がさつに聽こえたが時平に向いた。七笑ひを達者に聽かせる。あれで一種凄妖の氣が漂れば頼母しい。佳世子の杉王は未だたゝみ込めぬが素直な擧質と感受性の豊かさがあつて、今後の努力で上昇しよう。松王の三勝は健達だがモウ一息深さと迫力が望ましい。

人形はプロでは櫻丸の貴美子が梅王を使ふ爲、稍畠違ひで氣勢が擧らぬ。僅かに梅子の松王が一人光りて他の人形が冴えぬため凡打に終つた。

○

車引の人形は不振だつたが次の「河庄」で俄然生氣を取り戻した。殊に貴美子の小春は前半が優れてゐる。心の底に深い死戀を秘めた遊女小春を哀艶に潤描する。

「紙治様と死ぬる約束」で、ホロリと涙をぬぐふ科や「死ぬる契約した事ぞ」で孫右衛門の膝に打伏して哀切に泣き崩れる姿態に、風情があつて餘韻のある光澤が滲じみ出た文五郎流の柔軟美を豊有する纖細な藝味に内面的な餘情が籠つて今迄見たこの人の役役では一番感心させられた。但し二度目の出からは繪畫的に動いて前の處ほど深い心情が流れぬが。治兵衛は番組では清子だが梅子が遣つた「心の中は皆おれがこと」の肩の線や手の使ひ方など榮三の命があつて誠に愉しい。女性にして榮三の持つ艶のある滋味を描き出す腕が一寸驚異だ。只「白石」を除くと松王—治兵衛—貞任—權太—岩根御前と出っ張りで敢闘するためか。小春が心にもない愛憎づかしを孫右衛門に述懐するのを格子の外で立聞きする場面で、天水桶に人形の身體をソックリ隠して了ふのは舞臺的な風致を消して餘情が無い。あれはせめて頬冠の手拭だけでも天水桶から出して見せた方が繪畫的な雅趣があらう。それでないとどうも治兵衛より梅子が立聞きして了ふ圖になる。清子の孫右衛門は堅實で

嫌味がない。決して「當て味」に行かぬ藝風が梅子と共に抜きんじてゐる。

淨瑠璃は「天滿に」から小春孫右衛門の引込みまでを越道巴住が擔當する。

「天滿に」をナルイ美しさで出る。纖巧な餘韻がある哀寂たる錆が乘らない「魂拔けて」も麗致に語るが「拔けて」に微妙な音階の起伏が淡い。治兵衛はサラ〳〵と淡巧に運ぶ。モタれずキバらず一通り練れてゐる孫右衛門は巧者に語つて錆こそないが垢拔けしてゐた。今の若さで樂々とナルく聽かせる技倆は凡庸でないが友次郎系の演出で「定めし金づく五兩十兩」を侍調から轉調してカラリと輕く町人調で云ふ。

それが稍際立つて技巧的に浮き上る。つい自然に町人の生地が滲じみ出て金のことを世話調で輕く出る演出の寸法は解るが、技巧に深い心が融合してこそ型も生き心も利く。器用過ぎる藝才に「魂の陰影」を加味したい。引込みで二度目に云ふ「其の繩とくな」は中々味に聽かせ前のと單調に重ならぬのは周到である。結局、越道の「河庄」は小春が好い。特に「突かれぬ胸にハッと貫き」を寫實一點張りに強く語らず哀美な餘韻を漂らす演出が濃やかだ。あれで小春の基底に哀婉な寂しさがじゆつくり流れれば完好である。「ぞめき戻りの身すがら太兵衛」から小津賀、紋敎に代る。東京女義の世話物は染登流の腹のある演出、美調妙韻で語る佳照風、寫實と心境の中間を巧妙に縫ふ小味に圓熟した小津賀と大體三つの行き方がある。

この外にもう一つ伊達子改土佐廣の故土佐風の潤美な演出もあるが。

小津賀の世話物を聞くと、如何にも惚れ拔いて語つてゐる愛情を感じる。しかしそれに亂溺がない。つまり「かなめ」の利いた愛情が餘韻のある巧さを渾出させる。小手の利く成熟した技巧が上滑らず、心情に食ひ入つて行く處に「ワザさ」であつて、技巧の嫌味を感じさせぬ洗練性がある。

善六、太兵衛が絡んで醸し出す、治兵衛への敵意と猥雜なユーモアなど幕政期の大阪市井人を覗かせる根强い濃色が無く稍江戸前でサラ〳〵とやるが、感情の機微を衝く可笑味があつて微笑へませる。只ここの治兵衛は餘りに靜澄で情痴の波動と焦感が淡過ぎた。奥へ行くと流石にメリハリがよく、小春への未練、情痴を餘韻のある巧さだ鮮動させる。「今生の思ひ出に女の面」でグツーとモリ上げる詩感豊かな情痴描寫に哀美な潤ひがある。孫右衛門は仄澁く巧描する。「ア、お手柄」を「ヌク味」のある皮肉さで音描する味「小腹が立つやら可笑しいやら」の複雜な哀悶をさざ波の如く巧緻にかきたてる。取り分け「笑ひに紛らす眞實の」は仄やかな陰影が心境的に妙出されて餘韻深い。

小春はこの人一流の廻はして刻み込む巧妙な演出で堪能させる。「いつそ心を」で堰を切つて奔流する哀感。「歎く小春もむごらしき」の段切れの愁美など圓熟妙緻でうつとりさせる。

紋敎の絃は練達にコナレ乍らバサ〳〵と干からびてゐないのが良い。

○

會主佳照は「中將姫」を出した。春季大會の出し物とダブルことを避けつつ、演目を撰定した企劃は分るが、この暑さに「安達」の雪降りと「中將姫」の雪責めが重なるのは多少季節的に無理かと案じたがじつと觀聽すると案外そうでも無い。

「中將姫」は私としては嫌ひな淨瑠璃だがこの人のを聽いて一寸好きになつた。若輩な私は文樂でも伊達大夫位しか聽いてゐなかつた爲この一段の面白さを知かつなた。

處が味つて見るとこの曲の音樂的、豐麗さは捨て難いものがあるが、故越路大夫が得意としたと云ふ話を先輩から聞いてゐるが越路土佐の如き美聲深韻の名人が他界した現在では女義に相應はしい語り物だ。

佳照は岩根御前と中將姫をよく語る。ネチ〳〵と腹黑い岩根の陰險な鋭惡さをじわ〳〵とモリ上げる熟韻がある。

雪實めになつて「御上意なれば是非がない」を浮離れず根强い徹惡を濃出する「西風の吹く時は」の中將姫など哀淑たる美韻があつて麗密である。桐の谷は左程でもないが、浮舟は描線が確かで呼吸も能くつんでゐた。

清一の絃は樂々と彈き乍ら奔流する情感を妙現する餘情と練韻があつた。

○

「白石」では斷然染登、猿幸が光彩を放つた。宮城野のクドキから團蝶に替つて染登が語る。この人の藝には隙きがない。

タタミ込みも鮮かだし藝格も引締つてゐる。特に「此妹は健めなかしら」の邊り心を滲じませる猿幸の妙音、人形の貴美子の信夫の素直な味と三者渾然溶合する惜愁美が溢れた。それと惣六の意見を艶を持たせて腹を聽かせる行き方が鍛錬されてゐてダレさせず倦きさせぬ健妙な藝味である。猿幸の絃は「たいこ末社の彈く三味に」の絢爛華麗な嬌音から「意見上手の親方が」で一轉する靜音に切々たる情愛が籠つて冴えてゐたこの人の持つ澄明な氣韻は師猿之助を髣髴させるやはらかな餘韻があつて深い心情美を豐描する。

○

人形では「鮨屋」の權太を使ふ梅子が一番感銘深い。描線の深さ、輪廓の大さ、氣魄の良さ、全く女性に惜しい凛質を鋭有してゐる。榮三の長所を攝取良出する內面的な技藝に空疎な模倣の嫌味と仕勝手が無く巨匠の藝魂にグツーと觸れる深味がある。殊に梶原に身替りの六代、若葉を見せたあとで直ぐ「らしろ向」で兩肌の汗を手拭でふきつつそつと目頭をぬぐふ型など克く摑んでゐる。

貴美子のお里は「維盛樣とは露知らず」で兩手を出して敬ふ型をし「雲井に近き御方へ」で手拭を口にくわへてやるせなく、その兩端を持つて戀慕の羞恥を情感的に描き出す。ここは歌舞伎の故歌右衛門風に「雲井に近き」で正面を切つて敬ふ方が情韻深い。そうやる方が「鮨屋の娘が惚られうか」が鮮かに生きる。その代り「父も聞へず母樣も」でしつとり手拭を口にくわへて泣き落すのは誠に嫋々たる風情がある。戀知り染めた小娘の可憐な色氣といぢらしい怨愁が流露して佳い型である。（一六、六、二九日）

第二十九回
女義若女會

九月一日雷門車橋亭

忠六　素八　松榮
玉三　素次　駒登久
新口　綾清　松榮
十種香　素廣　駒登久
酒屋　小津賀　紋教

△事務所芝區巴町四一（電芝二五七七）